

ドラママリーディング入門

渡辺 知明

もくじ

- (1) ドラママリーディングとは何か 3
 - ドラママリーディングの台本
 - ドラママリーディングのすすめ
- (2) ドラママリーディングの特徴 5
 - 動き・身振り・演技
 - 舞台効果について
 - 読みかたの工夫
- (3) ドラママリーディング台本の特徴 7
 - 上演時間について
 - 台本の作り方
- (4) ドラママリーディングの声の表現 8
 - 舞台での声の3通り
 - 作品を構成する声
- (5) ドラママリーディングについてお願い 10

(1) ドラマリーディングとは何か

ドラマリーディングを日本語で言うなら、「ドラマ」とは、戯曲あるいは演劇のこと、「リーディング」とは読みとなります。つまり、ドラマのように役割を分担して作品を読むことです。ただし、戯曲や小説をそのまま読むではありません。ドラマリーディングのためにアレンジした台本をドラマティックに読むのです。「読み」といったら「朗読」というのが一般的です。「朗読劇」という言い方もあります。また、演劇の分野の人たちも戯曲を「朗読」することをドラマリーディングと呼んでいます。しかし、ドラマリーディングの目ざすところは、朗読と演劇と双方の利点を生かして、文学作品を声だけで表現することなのです。朗読にとつては表現の限界を脱するため、演劇にとつてはせりふの表現力を高めるために、どちらにとつても有益な表現ジャンルなのです。

●ドラマリーディングの台本

ドラマリーディング用の台本は、小説や戯曲をもとにして作られます。戯曲のかたちを基本にして、「語り」と「せりふ」とで構成されます。ただし、演ずるものではなく、読むものですから戯曲とのちがいがあります。戯曲で演じられるのはもっぱら「せりふ」で、ト書きはもっぱら客観的な説明にとどまります。

それに対して、ドラマリーディングの「語り」は、キャラクターとして性格を持つものです。戯曲のト書きとはちがいます。せりふを言う人物と対等の価値を持つのです。また、小説の「地の文」

はさまざまな要素が混じり合っています。それをドラマリーディングでは、いくつかの「語り」に分割して対話にします。つまり、ドラマリーディングのためには、戯曲そのままの読みではなく、独自に作られた台本が必要なのです。そのような台本の作り方については後で紹介いたします。

●ドラマリーディングのすすめ

ドラマリーディングは、朗読に関わる人、演劇に関わる人、一般の社会人や子どもたちにとって有益なことばの訓練法です。いろいろな教育効果があります。

第1に、朗読における表現力の向上です。今の日本の朗読は文章の読み上げであって、アナウンスかナレーションのようなものです。とても、文学作品の表現とはいえません。せめて、「地の文」と「会話」を区別した表現が必要です。「地の文」が「語り」に、「会話」が「せりふ」になるような表現です。ドラマリーディングの役割を分担することで、ひとりで作品を朗読するときの基礎的な訓練になるのです。

第2に、演劇においては、せりふの語りかたの訓練になります。演劇には、動きと身振りがありません。せりふの表現力に不足しても、アクションでごまかすことができます。観客もせりふの欠点に関して眼でだまされます。しかし、ドラマリーディングではそうは行きません。せりふにおける声の距離感の変化や繊細な心情の表現が求められるからです。それは「語り」の表現にも共通します。

そして、第3に、ドラマリーディングは、おとなにとつても子どもにとつても、ことばの訓練になります。演劇とはちがってせりふを暗記したり動きを覚える必要がありませんから、気軽に演じ

られます。それでいて高度な表現力の訓練になるので、社会人にとっては日常のことばのやりとりを鍛えられるし、学校教育で使えば文学作品の読み取りや体験による文学作品の味わいとなります。

(2)ドラマリーディングの特徴

リーディングというと朗読の延長かと思われるでしょう。しかし、ことばの表現について朗読の理論から学ぶべきことほありません。それに対して、演劇から学ぶことはたくさんあります。演劇はドラマリーディングに最も近いジャンルです。ただし、ドラマリーディングとの基本的なちがひがあります。分かりやすいように演劇と比較しながらドラマリーディングの原則を解説しましょう。

●動き・身振り・演技

第1に、動きがないことです。演劇はせりふと動きと二つの要素で成り立っています。しかし、ドラマリーディングには動きがありません。身振りも演技もありません。「語り」とせりふということばだけの表現です。読み手が出てきて正面を向いて読むだけです。立ち位置の移動もありません。せいぜい、椅子に腰かけるか立ち上がるかです。途中で聞き手の顔を見たりもしません。せりふのやりとりのときにも、読み手はお互いに向き合ったりしません。聞き手がその動きを見ると何か意味があるのかとムダなことを考えてしまうからです。読み手も動きに注意を取られると、作品への集中力を失います。その結果、中途半端な演劇に戻ってしまいます。ただし、感情が動いて、からだ思わず揺れてしまうことはあります。

●舞台効果について

第2に、ことばの表現だけで舞台効果には頼りません。演劇は、舞台を見るものですが、ドラマリーディングは聞くものです。ですから、舞台装置、照明、大道具、小道具、衣装、音楽などは使いません。マイクも拡声装置も使いません。そのかわり、ナマの声による作品の表現に集中するのです。そもそも視覚に頼らないのですから舞台も必要ありません。音の響きさえよければ、どんな会場でも公演できるわけです。人が集まれる公共の施設でも喫茶店でもいいのです。客席も暗くはせずに、読み手が観客の顔を見て反応が分かる明るさにします。何よりも重要なのは、観客に声を聞かせるのではなく、ことばで表現して作品世界を想像させることなのです。

●読みかたの工夫

第3に、動きの演技からことばの演技への転換があります。演劇のせりふの表現は役者の動きに助けられています。しかし、ドラマリーディングでは、ことばだけがたよりです。演技ではなく作品を読むのですから微妙な表現になります。朗読でも、アナウンスでも、ナレーションでもありません。読むことそのものが表現になります。演劇では台本は演技の前段階の準備ですが、ドラマリーディングでは、作品の読みが最終の表現なのです。作品の理解と表現とが一体化した読みです。決まった一つのかたちの読みを準備して本番で発表するのでもありません。あらかじめ読んで理解したことを声に出すというのではなく、即興的に作品を読んでいく過程が表現なのです。毎回毎回、読み手は作品と直接に向き合うのです。聞き手に自分の声を聞かせるのではなく、作品そのものの理想の声を表現します。

(3) ドラマリーディング台本の特徴

ドラマリーディングの台本は「語り」と「せりふ」とから成り立っています。戯曲によく似た形式なのですが、戯曲をそのまま台本には使えません。演劇のせりふは、あくまで動きをともなったものです。せりふだけ取り出して読んだのではドラマリーディングにならないのです。戯曲には「ト書き」というものがあって、せりふでは表現できない動作や身振りについて書かれています。それがドラマリーディングでは表現できませんから、「語り」に書き換えて取り入れる必要があります。さらに、どの場面を削るか、どの部分を取り出すか、長いせりふのどこを削るか、ということが問題になります。

●上演時間について

ドラマリーディングの時間的な長さはどのくらいがいいのでしょうか。台本を作るときには、上演時間を考慮する必要があります。上演時間は聞き手にとっては聞くことに集中できる時間になります。演劇ならば2時間半くらいまでの上演は普通です。それは、いわゆる気分転換の場面があるからです。さらに、歌やダンスなどが入る芝居もあります。それに対して、ドラマリーディングは耳だけで声の表現を聞くものですから、どれだけ時間、集中できるかは重要な問題です。わたしの経験からは45分が限度だと思っています。

●台本の作り方

- ①ドラマリーディングのためにはドラマリーディング用の台本が必要です。小説か戯曲をもとにして作ります。小説でも戯曲でも、それに応じて編集する必要があります。小説をもとにしたほうが作るのが簡単で、おもしろい台本ができます。戯曲の場合には、いくらか手間がかかります。
- ②戯曲をドラマリーディングにする場合、ト書きに解釈を加えた「語り」の部分をつけ加えます。「語り手」はナレーターではなく、演出家と批評家の性格をもつことになります。その分だけ小説の台本化よりもめんどろです。
- ③小説の場合、「語り手」が示された作品がドラマリーディングに向いています。「語り手」は無人称のナレーターではなく、キャラクターとしての性格を持っています。ドラマの展開における「語り手」の心理や感情の変化が、ドラマリーディングのおもしろさです。
- ④小説から会話の部分と内言の部分で人物のせりふとして切り出します。そして、「地の文」は原則として、二人の「語り手」の対話に分割します。一人は進行係、もうひとりが注釈や批評を受け持ちます。この分担は漫才で言うなら、「ボケ」と「突っ込み」になります。時には、3人以上で「語り」を分担するのもよいでしょう。

(4) ドラマリーディングの声の表現

声の表現力がドラマリーディングのすべてです。声のほかには表現手段がありません。そもそも芸術は何らかの制限があることによって表現が発展します。ドラマリーディングでは、人物の動き

や人物同士の位置関係まで、声そのものによって表現されるのです。声そのものへのこだわりが重要です。

●舞台での声の3通り

ドラマリーディングは、声こそがすべてという世界です。舞台におけるドラマリーディングの声は次の3通りです。

- ①劇場全体に響く声（観客に聞かせる声）
- ②人物同士のやりとりの声（お互いが対話する声）
- ③独り言・独白の声（自分で聞いて確認する声）

演劇の基本として広い劇場の舞台から観客に声を聞かせるという大前提があります。舞台の制約上、客席に響く声が必要ですから、大声を張り上げるようになります。とくに苦手なのは、ひとりごとを観客に聞こえるように語ることです。ドラマリーディングでは、これが最大の目標ではなくなるので、微妙な独白の表現や小声での対話のやり取りも可能になります。つまり、発声や発音の基本から、人物のせりふのやりとりまで演劇とはちがった表現をすることが可能になるのです。

●作品を構成する声

ドラマリーディングの声は、演ずる声ではなく、作品を表現する声です。作品を構成する声には、すべて距離感があります。ドラマリーディングでは、声で空間の表現までしなければなりません。それぞれの声が、どういう場で、だれに向けて語られるのかという作品構成上の基本原則です。

ドラマリーディングの声は、作品の世界における「語り手」や人物の配置を示します。それは次の3通りになります。「これ、それ、あれ」という指示語で距離を示します。実際に発声して、その距離感のちがいを確かめてください。

*

- ①「これ」——聞き手は自分です。読み手自身の内部に想定された聞き手に納得させる声です。「聞き手」なしでは、単なるつぶやきになってしまいます。独り言のようですが表現意識があります。ひとりごとや内言（心の声）の表現です。おもに、人物のせりふで使われますが、時には、「語り手」がくだけた物言いをするときの声になります。

- ②「それ」——対話の声です。人と人が向き合っていることを交わす表現です。相手との距離はさまざまです。それに応じた距離の表現があります。人物のせりふに多用されます。ただし、一つのせりふが一つの調子になるのではなく、せりふの部分ごとに距離が変わります。シェイクスピアのせりふなども、その7割が自分自身に向けたものであり、あとの3割で相手に語りかけるものです。

- ③「あれ」——遠い距離で語ります。特定の相手に語るのではなく、不特定の「みんな」に伝える声です。テレビなどで耳にするアナウンスやナレーションの調子です。朗読によく聞かれる客観的な語りはこの表現です。ドラマリーディングの「語り」では例外的な表現です。というのは、キャラクターとしての「語り手」が登場するところがドラマリーディングの特徴だからです。

(5) ドラマリーディングについてお願い

最後にドラマリーディングについて7つのお願いをします。もちろん、上演の条件に応じて変更してもかまいません。ドラマリーディングの最大の目的は、声の表現による楽しみを味わうこと、そのために作品の表現を磨きあげるといふことなのです。

①**気楽に語って楽しんでください**——朗読のように正確に読まなくていいのです。文字の読みまちがいがあったってかまいません。学校の勉強のような朗読劇ではありません。目の前の聞き手に話しかけるようなつもりで気楽に読みましょう。まちがったってかまいません。読み手がリラックスして気楽に読めば聞き手も楽しんで聞いてくれます。

②**マイクや音響装置は使わないでください**——ナマの声には魅力があります。読み手の責任で声の調整ができます。マイクや音響装置を使うとお金がかかるし、手間もかかるし、なにしろ、本当の読み手の声が聞こえなくなってしまうです。ナマの声ならば、会場の変化にも対応できます。会場の空間の響きまで意識した発声と表現で作品を読むことができます。

③**豪華な衣装は着ないでください**——舞台衣装などは不要です。普段着による日常感覚で聞き手に話しかけましょう。豪華な衣装ではなく、黒か白の服装で統一すると、聞き手も目移りせずに作品の世界を想像することができます。そのかわり、「語り手」と人物とで台本の表紙の色を変えるのもちよつとした演出です。でも、主役の人物はちよつと目立つ色の服を着るのもいいですね。

④**わざわざ動いたりしないでください**——わざわざらしい演技などしなくていいのです。台本の読みに集中しましょう。作品の距離とともに、こころの中から自然に動きが生まれます。わざわざ動いて見せたりする必要はありません。人物のやりとりのときにも、相手の顔を見ないで、正面を向いて相手の顔を想像してください。聞き手のなかに知人を見つけても知らん顔して作品に集中しましょう。

⑤**舞台を飾りたてないでください**——舞台を飾らないでください。眼を閉じて聞いても作品の場面が想像できるようにします。いわば、ラジオドラマのような世界です。飾り立てたテレビの場面ではなく、かつてのラジオ番組の楽しさの再現です。かといって、ラジオドラマのような音響効果まで考えなくてもかまいません。声の表現が第一です。声のことばだけでも十分に楽しめるのです。

⑥**楽器や音楽なしで楽しんでください**——楽団やカラオケがなくても歌は歌えます。アカペラです。人の声の表現が作品世界を表現するには適しています。客席の電話の呼び出し音、ポリ袋のカサカサいう音、観客の咳など、ほんのちよつとした音が気になります。出来あいの録音された音楽なども現場の声には不釣り合いです。どうしてもやりたいなら、現場でナマの楽器との掛け合いです。

⑦**舞台には上がらないでください**——舞台上がると上がってしまうという人がいます。ドラマリーディングでは、聞き手と読み手との立場は対等です。聞き手よりも高い舞台に立つよりも、客席と同じ平場で顔が見えればいいのです。日ごろ読書をするように、読み手と聞き手といっしょに作品世界を楽しみましょう。照明も舞台も装置も道具も必要ないのですから、どこか小さな喫茶店でも、図書館や美術館や文学館などの公共施設の片隅でも上演できます。

(了)

【作成】2014年11月9日